

急性副鼻腔炎の細菌学的サーベイランス

池田 頼彦 保 富 宗 城 河 野 正 充 小 上 真 史
竹 井 慎 鈴 本 正 樹 島 田 純 田 村 真 司
藤 原 啓 次 山 中 昇

和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

【はじめに】 急性副鼻腔炎は、急性鼻炎や急性上気道炎に続発して発症し、多くの場合には急性鼻・副鼻腔炎の病態をとる。急性鼻炎や急性上気道炎を引き起こすウイルス感染に引き続き、肺炎球菌、インフルエンザ菌、モラクセラ・カタラーリスなどの細菌感染が起こると考えられている。近年、これらの起炎菌の薬剤耐性化が急増するに伴い、急性鼻・副鼻腔炎の遷延化・難治化が増加し、日常診療においても大きな問題となっている。急性副鼻腔炎の臨床的なエビデンスを作成することが急務である。

【方法と結果】 今回、急性鼻・副鼻腔炎における起炎微生物サーベイランス (Acute Rhinosinusitis study group: ARhiS) において、急性鼻・副鼻腔炎 220 例の起炎菌についての検討を行ったので報告する。急性鼻・副鼻腔炎患者より分離された起炎菌としては、肺炎球菌が 24%、インフルエンザ菌が 22.2%、モラクセラ・カタラーリスが 6.5% に検出された。薬剤感受性については、肺炎球菌では 65.0% がペニシリン感性肺炎球菌 (PSSP)、23.0% がペニシリン中等度耐性肺炎球菌 (PISP)、11.7% がペニシリン耐性肺炎球菌 (PRSP) であった。一方、インフルエンザ菌については 34.5% が β ラクタマーゼ非産生アンピシリン感性インフルエンザ菌 (BLNAS)、7.3% が β ラクタマーゼ非産生アンピシリン中等度耐性インフルエンザ菌 (BLNAR ABPC MIC = 2 μ /ml)、58.2% が β ラクタマーゼ非産生アンピシリン耐性インフルエンザ菌 (BLNAR ABPC MIC \geq 4 μ /ml) であった。

【結 論】 急性鼻・副鼻腔炎の起炎菌サーベイランスを行い、起炎菌の高い耐性化率が明らかになった。急性鼻・副鼻腔炎の治療においては起炎菌の検索とともに薬剤感受性の検索が重要であると考えられた。